

特集①「歴史と地理をつなぐ2」

# 地理教材の共有化を目指して

柴田 祥彦

## 1. 「地理総合」必修化の課題

地理と歴史のバランスの良い履修を求めてきた私にとって、「地理総合」の必修化は実に喜ばしいことである。しかし、高校現場では地理を専門とする教員が少ないため、歴史を専門とされる先生方が「地理総合」をご担当されることも十分に考えられ、その時にさまざまな課題が出てくることが予想される。そこで私は、以下のような地理教材の共有化を考えている。

かつて私が日本史と世界史を担当した時、解決できなかった課題が3点あった。それは、授業に織り交ぜる「エピソード」が不足していたこと、「関連した事象」を生徒たちに提示できなかったこと、そして「質の高い定期テスト」を作成できなかったことである。このことから、歴史の先生方が「地理総合」をご担当される際に、同じような点で困るのではないかと推察している。

地理を専門とする教員として、この課題に対してどのようなことが可能なのであろうか。

## 2. エピソードの共有

歴史の先生方はエピソードがおもしろく、また織り込ませるタイミングも実にうまい。「その人物は幼少期にこんなことがあってね」とか「教科書にはさらっと書いてあるけど、この英傑は決断する前にこんなふう<sup>しゅんじゆん</sup>に逡巡したんだ」などと生徒の興味を引き込むエピソードを披露する一方で、「この事件については近年新しい史料とともに別の解釈もでてきてね」といった探究的な学びに導いたりといった具合である。このような専門家ならではの豊富なエピソードこそが、歴史好きな生徒を生み出す源泉であろう。

当然のことながら地理の分野にもこのようなエピソードがある。本来であれば「地理総合」の授業をご担当される歴史の先生方が教材研究を通じて見つけ出し、アレンジしていただくのがベストであろうが、今やそんなゆとりは学校現場には微塵<sup>みじん</sup>もない。であるならばセカンドベストとして、「地理総合」の授業で活用できるエピソードをまとめ、それを web サイトに up し、

いつでもどこからでも見られるようにしておくべきなのではないか、と最近考えるようになった。すでにデジタルネイティブ世代が学校の先生になっている現在、教材をネット上に公開し、良き授業方法や、それに関するエピソードを共有することは、時代に即した新しい教員研修のスタイルなのではないだろうか。

### 3. 関連した事象の共有

私は数年前、地理の立場から東京都教育委員会が作成した「江戸から東京へ」という副読本の作成に関わった<sup>1)</sup>。その編集作業の過程で歴史の先生方と近現代史について議論していた時に、同じ事象（素材）であってもそこから導き出すテーマ（調理方法や料理）が違うのだなと感じることが多々あった。

例えば関東大震災では、地理の教員は（洪積）台地と沖積平野で揺れが異なり、それが被害の大小につながったという自然地理的な視点で授業を展開していくことが多い。一方、歴史の先生方は「その出来事が後世にどのような影響を与えたのか」という視点で授業を展開しているため、震災手形のことを語られるのだ。

私はこの事例から、地理と歴史どちらか一方だけ学ぶのではなく、歴史に地理というスパイスを、逆に地理に歴史というスパイスをふりかけると実においしい「料理」ができあがるという

ことを改めて実感することができた。そしてこの経験が、冒頭の「地理と歴史のバランスの良い履修」を求める原動力となっていったのである。

話を本題に戻していく。地理の授業において関東大震災に「関連した事象」とは何であろうか。

歴史の授業で古文書などの史料を活用するように、地理であればまず地図を活用したい。サイトに辿り着いてからお目当てのものを探すが少々億劫なのが玉に瑕<sup>きず</sup>なのだが、国土地理院にはさまざまな地形図が無料で公開されている。地図帳の活用ももちろん有効だが、コンピュータ画面に映し出される地図を活用していくことは、スマホ全盛時代に重要性が増している。しかし公立学校ではコンピュータが古かったり、インターネット回線が極めて貧弱なため、40人の生徒が一斉にアクセスするとハングアップすることも十分に考えられる。そこで本来ならば生徒たちに操作してほしいのはやまやまなのだが、教員が代表して操作し、それを生徒たちが見るというのも現実的な対応であろう。国土地理院のサイトでは、等高線を判読することなく直感的に高低差を把握できるデジタル標高地形図という優れた地図がある。以下は、その「東京都区部」の地形図を生徒たちに提示した際の関東大震災と「関連した事象」の例を考えていく（p.30 図1）。

この地図ではまず江戸城が立地している場所を確認したい。等高線を細かく読みとる必要がないので、直感的に江戸城が（洪積）台地の端にあることを把握できるだろう。しかしここで終わってしまっただけでは地理的見方・考え方が深まらない。そこで「関連した事象」として、同時期に存在した代表的な城である名古屋城、大阪城の立地場所を確認させてみる。するとこの三つの城はいずれも台地の端に立地していることと気づくはずだ。ここからさらに、「台地の端に城を築城することのメリット」を考えさせるのもよいだろう。

あるいはGISの技法を用いて、この地図に関東大震災時の震度分布を重ね合わせてみるのはどうだろうか。そうすれば、（洪積）台地の上より沖積平野の方が揺れが大きいことが確認できるだろう。

また、この地図ではゼロメートル地帯が広がっている様子がよくわかる。これも、ただ「東京の下町には地下水の汲み上げによって生じた0メートル地帯が広がっている」と事実の説明で終わってしまっただけでは思考が深まらない。そこで新たな問い、例えば「どうして地盤沈下の原因が地下水の過剰揚水だとわかったのだろうか？」を投げかけてはどうだろうか。その時に以下のような地盤沈下を示すグラフを読み取らせると効果的であろう（図1）。そして、なぜ戦時中に地盤沈下が鈍化している

のかを考えさせたりする学習こそ、アクティブ・ラーニング形式での授業が有効なのではないだろうか。

このグラフからは、大量に地下水を揚水していた工場が空襲で破壊されると地盤沈下が鈍化し、戦後工場が復興するとまた地盤沈下が始まることがわかる。このような考察は、地理と歴史の双方の知識を活用する好例であると考えている。

#### 4. テスト問題の共有

地名や用語といった知識を問うテストの作成は比較的容易である。しかしこれが地理的見方・考え方を問う問題となると俄然ハードルが上がる。これは歴史の先生のみならず、地理を専門とする若手の先生方にも言えるのではないだろうか。地理の教員はたいてい学校に一人しかいないので、職場でテスト問題作りのアドバイスをもらうことが難しい。また、研修会も授業についてのものばかりで試験問題作りの研修会はあまり聞いたことがない。しかも教員にとって、試験問題の公開はなんとなく恥ずかしいものであり、心理的なハードルも高い。だからこそ、ネット上にお手本となるような良質な定期テスト問題を公開することには、大きな意味があるのではないかと、思っている。もちろん、そうすると生徒が見るのではないかと、教員の資質向上につながらないのではないかと、といった

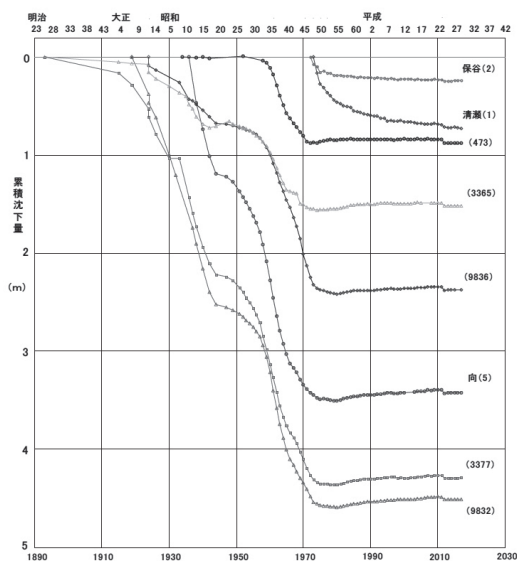


図1 主要水準基標の累積沈下量  
 図 (東京都建設局「平成28年「地盤沈下調査報告書」より)

懸念もあろうが、そのような詳細は今後2022年までに考えていけばよいであろう。

## 5. さいごに

「地理総合」の必修化に際してはこのような課題があるが、web, internet, smartphone というツールを活用し、良きノウハウを公開し、ベテランの先生方の授業テクニックなどを継承したいと考えている。どこでこれらを公開するのかはまだ具体的には考えていない。この原稿はこのような突飛ともいえる私見を世に問う、観測気球としての意味もある。

今後は、このような考えにご興味のある方々と連携しながら、充実した「地理総合」の授業の普及のために、

地理教材の共有化を目指していきたいと考えている。

### <註>

- 1) 東京都教育委員会 [http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/school/study\\_material/tradition/edokaratokyohe.html](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/school/study_material/tradition/edokaratokyohe.html)

(しばた よしひこ／

東京都立国分寺高等学校指導教諭)